



特集

「小5 統一合判」 4

中学入試レポート vol.

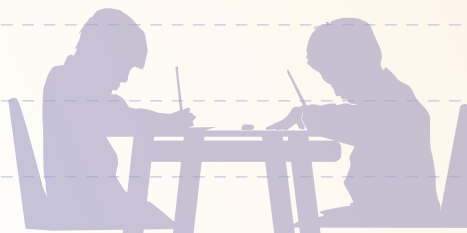
これからの社会に 求められる力とは？

私立中高一貫校におけるキャリア 教育と国際教育を考える！

今年も残すところ数週間！現6年生たちが来春の中学受験に向け、ラストスパートをかけるなか、先輩たちに負けじと、5年生の皆さんも受験勉強に励んでいることでしょう。

小5「統一合判」テストも今回で4回目。保護者の皆さんには、今回のテスト結果を生かし、来年から本格化する受験勉強に結びつけてほしいと思います。

今回の入試レポートでは、再来年2019年入試でのお子さんの学校選びのために、私立中高一貫校がこれからの社会をどのように想定し、そこで求められる力を育もうとしているのか、「国際（グローバル）教育」と「キャリア教育」の視点からご紹介します。



首都圏模試センター

2030年には雇用者数が 240万人減少！？

わが子が現在取り組む受験勉強を乗り越え、再来年の春に見事目標中学に入学、その後中高の6年間を経て大学や大学院を卒業して社会に出る2029年以降、私たち大人が経験していない近未来の社会はどのような変化を遂げているのでしょうか。

アメリカ・ニューヨーク市立大学大学院センターのキャシー・デビッドソン教授は、「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後に、今は存在しない職業に就く」と予測しています。

また2017年の初頭には、AI（人工知能）技術がこのまま社会に普及すると、日本の国内総生産（GDP）が2030年に50兆円増える一方、雇用者数は240万人減るとの試算が、三菱総合研究所から発表されました。かつて英国のオックスフォード大学で人工知能などの研究を手がけているマイケル・A・オズボーン氏が、「今後10～20年程度で、約47%の仕事が自動化される可能性が高い」といったように、AIの急速な進化により、新しく創出される仕事もあれば、近い将来には消えてなくなる仕事もあるということです。

こうした時代の変化に伴い、日本におけるグローバル化も、かつてないほどの勢いで急速に進んでいます。現在の小学生が社会に出るときには、いま以上に、世界やアジア諸国のなかでも経済的な競争は激しいものになるでしょう。しかも競争だけではなく、世界各国の人々と意思を合わせ、協働・協調、そして共生を図りつつ、グローバルな意識や視点で物事を考え、国家や民族の壁を越えて地球全体に課せられた諸問題を解決していく力が求められる時代となるのです。

いま世界のビジネスの第一線で活躍する保護者の



すでに多くの私学で導入されているタブレット端末。授業の効率化とともに、これからの社会に必須となる情報活用能力を養います。

皆さんの中には、将来の新たな社会を担う、わが子の世代に求められる力がどのように変化していくのか、すでに実感されている方も多いのではないのでしょうか。

教育が担うものが、個人の幸せと同時に、社会（民族や国家、世界）の安定（平和と繁栄）だとすれば、経済や政治など、さまざまな意味で「国境がなくなる」今後の社会では、グローバルに物事を考え、論じ、実現・実行することのできる人材が求められます。

そのためには、当たり前英語で話すことができ、国や民族、文化の違いを越え、互いの意思や主張を尊重しながら理解し合える力が必要になるのです。

環境やエネルギー問題など、今の世界が抱えるさまざまな問題について、自ら問題意識を持ち、調べ、解決する、「クリティカル・シンキング」の力もこれからは必須となるでしょう。

また、このような社会で、何か大きな仕事を成し遂げるには、仲間のサポートも必要になります。そのためにも、豊かな学力や知識・教養に加え、対話的なコミュニケーションの力、多文化のもとで共生・協調できる力、人々をまとめリードする力、そして多くの仲間と力を合わせて（コラボレーション）、双発的・相乗的な力（シナジー）を発揮できるような、幅の広い人間力が求められるのです。今後は国境を越えた相互理解の手段として、音楽・芸術・スポーツなどの素養も、求められる時代になるでしょう。

こうした活動をするときの行動や考え方のベース



には、人々の自由な意思（リベラル）や公正さ（フェアネス）、正義（ジャスティス）、寛容（トレランス）などを大切にす精神性や意思の力、行動規範も欠くことのできない要素となります。

このような人間的な総合力は、簡単に身につけられるものではありません。だからこそ、人生で最も多感で吸収力のある中高生の時代に、これらの力の基礎になる学力や人間力を育て、さまざまなことを仲間と一緒に体験できる私立中高一貫校こそ、これからの教育に適した環境といえるのです。

もはや“語学の枠”を超えた 私立一貫校の国際（グローバル）教育

受験やテスト対策のために、必死に単語カードをめくっていた時代も今は昔。保護者の皆さんの学生時代とは大きく異なり、英語の授業もすっかり様変わりしました。現在、政府は2020年の「大学入試改革」や東京オリンピック・パラリンピック開催を見据え、段階的に「小学校での英語教育義務化」を進めています。

すでに小学5・6年では年間35単位時間の「外国語活動」が行われていますが、来年2018年からは、それが小3・4年に前倒しされます。一方、小学5・6年からは英語が正式な教科に組み込まれ、成績の対象として評価されることになります。

外国語活動においては、音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として様々な活動を行うとされています。つまり、これらの政府の方針から紐解くと、現在のセンター試験に変わる「大学入学共通テスト（仮称）」では、ライティングやスピーキングなどの「4技能」を駆使した英語のコミュ

ニケーション能力が民間の資格・検定試験を活用して評価されることになるのです。

この動きに先立ち、すでに多くの私立中高一貫校では、より実践的かつ先進的な英語教育に取り組み、すでに大きな成果を残しています。

たとえば、ほとんどの私立中高一貫校には複数のネイティブの教員が常駐し、オールイングリッシュでの英会話授業を実施するなど“本物の英語”に触れる機会を設けています。なかには、他の教科の授業を英語で行う「イマージョン教育」や、フィリピン・セブ島などのネイティブとマンツーマンで対話ができるオンラインでの英会話プログラムを導入する学校も増えてきました。

また中学時から「国際」や「グローバル」を冠するコースを設置することで、海外大学への進学や真のグローバル人材の育成に力を入れる学校も掲げる学校も目立って増加しています。

2015年の共学化以降、高度な実践教育を展開する◎三田国際学園では、18名のInternational Teachers（インターナショナル教員）が日本人教員と変わらない立場で教科や学年を担当し、行事や日々の学校生活の充実に向け、奔走しています。

併設高校がSGH（スーパーグローバルハイスクール）に指定されている●佼成学園女子では、ネイティブによるイマージョン教育をはじめ、毎年6月と10月には『英検まつり』を全学年で実施しています。期間中には、放課後に級別『英検対策講座』を開講。



インターネットの通信機能を使って、海外のネイティブ講師と気軽に会話を楽しめるオンライン英会話。



ネイティブ教員が常駐する共立女子の「ランゲージスクエア」。さまざまなイベントも行われます。

さらに毎朝、どれだけ英単語、英熟語を覚えたかを競う『英単チャレンジ』に取り組んでいます。この『英検まつり』は英語科教員だけでなく、全教科の教職員が関わる一大イベント。体育祭と同じようにクラス対抗で行われるので、互いがよい刺激を受け合いながら、飛躍的に上級の合格者数を伸ばしています。

留学制度や海外語学研修が充実しているのも私立一貫校の特徴です。◎東京成徳大中学・高等学校では、これまで希望制の学期留学を実施していましたが、2017年度の中学入学生からは全員参加の標準プログラムになりました。かなりの英断ですが、これも同校の留学に対する実績とノウハウ、そして、何よりも留学後の生徒の成長に確かな手応えを感じているからに他なりません。

ハード面でも●山脇学園の「イングリッシュアイランド」や●共立女子の「ランゲージスクエア」のように、常駐するネイティブと生徒たちが気軽に英会話を楽しめる日本語禁止のスペース（イングリッシュルーム）を設ける学校も増加しています。これも目指す教育にあった設備や環境を自由にカスタマイズできる私学ならではのメリットと言えるでしょう。

このような中、入口となる中学入試にもグローバル化の波は確実に押し寄せています。これまでも帰国生入試などでは英語入試が行われてきました。しかしここ数年、一般入試に英語を取り入れる学校が急速に増加しています。首都圏では2015年に33校、2016年64校、そして2017年には95校の私立中学が何らかの形で英語による入試を実施し

ました。

現小5生が中学受験をする2019年には、◎慶應義塾湘南藤沢が従来の4科型入試に加え、国語・英語・算数の3教科型入試を新設する予定です。千葉の◎市川が今年度から英語選択入試を導入したように、この傾向は難関校にも徐々に波及しています。

これまで中学受験の準備はしてこなかったけど、幼少期から英会話には力を入れてきた、という親子もきっと多いはず。この動きはそのような受験生にとっては大きな朗報であると同時に、私立中高一貫校の教育そのものが、これからのグローバル社会を反映していることを知る、ひとつのきっかけになるのではないのでしょうか。

わが子が「より良く生きる」ための私学の進路&キャリア教育

もともと義務教育の期間であり、卒業して社会に出るまでに最低限必要とされる学力を身につけるための「学習指導要領」が課せられてきた公立中学校。一方の私立中高一貫校は、卒業後は高等教育（大学・大学院）につながる、学問・研究の基礎づくりのための「進学準備教育」を行う中等教育（中学・高校）機関として発展してきました。

そのため、高校への進学率が98パーセントまで高まり、さらに大学・短大への進学率が50パーセントを超えた現在であっても、公立中学から公立高校へ進学する既定の公立学校の「完成教育」とは違った「(大学への) 進学準備教育」という側面を私立中高一貫校は持っています。

そのために、ほとんどの私立中高一貫校では、大学進学を前提とした教育課程（カリキュラム）、シラバスを組み、高校卒業までの6年間で、大学に進学してからの学問・研究につながる学力の育成や、学習姿勢の下地づくりをめざしているのです。



系列の大学を持たない中高までの「進学校」であれば、生徒が希望する進路に向けて、大学受験をクリアできる力を育てます。そのため、中学入学から大学受験までを見通すことのできる教員が、毎年の大学入試問題にも目を通し、6年間でどこまでの（どのような）学力を身につけさせるかという目標に向け、遡って中1からのカリキュラムを組み立てます。

一方で系列の大学を持ち、大半の卒業生が推薦でその大学への進学ができる「大学付属校」であっても、大学に進学してからの学問・研究に対応できる学力を育てるために、6年間の教育体系を考えています。

最近では、一部の難関私立大学（慶應義塾大学や早稲田大学など）を除くほとんどの私立大学の付属校が、自校の系列大学にも何割かは推薦で進学でき、同時にそれ以外の大学（医学部をはじめ系列大学にない学部や、系列大学以外の難関国公立大学など）にも受験して合格できる力を育ててくれる、いわゆる「半付属校・半進学校」化する中高一貫校も増えています。こうしたタイプの学校は、先の「進学校」と「付属校」の両方を併せ持ち、大学に合格、あるいは進学するために必要な学力を生徒に身につけさせる教科教育の組み立てを工夫しています。

古くは家政・裁縫などの実学系の学校としてスタートした女子校でも、女性の社会進出の増加にともない、めざす教育のあり方を変化させ、やはり生徒の多くが卒業後は高等教育（大学・大学院）に進学する進学準備を行う学校へと変貌を遂げています。

現在の中学受験生の保護者が中高生だった頃には、すでに多くの私立女子校が、「進学校（あるいは大学付属校）」に様変わりしていました。しかし創立期の家政・裁縫系の女子校だった頃の教育姿勢やイメージが色濃く残る私立中高一貫校（●豊島岡女子学園の「運針」などはその典型）もあるので、そうした女子校の伝統と変化にも注目してみてください。

“相互理解・協調・共生・協働の時代”に必要とされる力を育む

そしていま、学校教育の世界で長年行われてきた「進路指導」という言葉も、「キャリア教育」へ変わりつつあります。つまり時代の変遷とともに、単に卒業後の進路（大学や就職先）を選ぶための指針や相談、アドバイスだけを求めるのではなく、職業見学や職場体験、知識人やOB・OGによる講演会など、将来のヒントや動機づけになる機会が中高の教育に求められるようになったということです。

そうした生徒の進路選択や意識づけのサポートを公立学校に先駆けて実現してきたのが、私立中高一貫校であり、現在の大学進学（合格）実績の圧倒的な優位性も、多くの私立中高一貫校が力を入れてきた、広い意味でのキャリア教育の“副産物”といえるでしょう。

このように私学の教育の成果が目立って伸びてゆく過程で、特に女子の教育に大きな役割を果たしたのが「キャリア教育」でした。

現在では女子の最難関に近い位置まで入試レベルを高めてきた●鷗友学園女子などは、そうした女子のキャリア教育をいち早く導入して実践してきた先進校です。

それは将来の職業選択と、結婚・出産など女性にとっての人生の節目や、その後の職業復帰なども含めた「キャリアデザイン」を考えさせるものであり、



ボランティア活動にも積極的な女子学生が、2016年に発生した熊本地震の復興支援として校内で販売した水。



生徒たちの円滑な人間関係づくりを援助するために導入された「構成的エンカウンター」。

もっと長い目で自分自身の価値観(人生観)や生き方、ライフワーク・バランスを考える「ライフデザイン」教育へと進化してきました。

●品川女子学院の「28プロジェクト」、●東京家政大学附属の「ヴァンサンカン(25歳)・プラン」、●麹町学園女子の「みらい科」なども、こうした私学の「ライフデザイン教育」の一環で、女性が自身の幸せを感じられる職業選択や生き方を考えるキャリア・デザインプログラムの典型といえるでしょう。

また、神奈川の●栄光学園や●サレジオ学院をはじめ、多くのミッション系(キリスト教)の学校では、「Men for Other's(他者のために生きる)」という共通のスローガンを掲げています。

たとえば志望する大学の合格に向けて努力をするのは、決して自分の(利益の)ためだけではなく、やがて社会に出て「他者に奉仕(貢献)するため」に必要なことだからと考える。そうして将来、他者や社会のために貢献できる力を身につけるための前提として、目の前に大学受験というハードルがあるならば、それをクリアするために全力で努力をする使命があるというのが、多くのカトリック校に共通した考え方です。

●聖セシリア女子では、人間関係づくりを援助する「構成的エンカウンター」を取り入れ、一人ひとりの心の在り方について考えることで他者理解の視点を持たせることを重視しています。●女子聖学院では、「他者を思いやる心」を育む一環として、ボラ

ンティア活動を推奨。2016年に発生した熊本地震では、その復興支援として、現地の名水で生産された「復興支援サイダー」を本校で販売。現在もその売上金を継続的に寄付しています。

私立中高一貫校の多くでは、こうした仕掛けが中高6年間の教育に組み込まれ、それが生徒の将来に向けた目標設定や目的意識を育てるうえでの大きな役割を果たしています。同時にそれが、日々の学習に向かうモチベーションを高めるきっかけにもなっているのです。

この先わが子が社会に出る2029年以降のグローバルな社会では、いま以上に多様な文化や価値観を持つ人々との“共生”“協働”の力が求められます。

そうした変化を前提に、ミッション・スクール以外の私学でも、その時代の世界で「より良い社会」をつくる担い手となり、自身も「より良く」生きていける力を育てることを教育の目標に掲げています。つまり、その素地や感覚、視点を中高6年間で育てることが、現在の私立中高一貫校の「キャリア教育」がめざすところなのです。

これは各私立中高一貫校が、生徒の思い描く進路やキャリアを実現するための学力の育成やサポートに力を注いでいるということに他なりません。このように時代の変化や世の中のニーズにも柔軟に対応して、新たな時代に即した教育や学習指導を実践してくれるのも、私立中高一貫校の魅力なのです。

男子と女子の成長リズムの違いを考えた 私立中高一貫校の進路&キャリア教育

また私立中高一貫校には、もともと男子校、女子校という「男女別学」教育を行ってきた学校が多かったことは、ご存知の方も多いと思います。

しかし、1980年代後半から現在までの約30年の間に、多くの私立中高が男子校、女子校から「共学化」



しました。現在では、男子校などは希少な存在となっています。

いずれにしても男子と女子とでは、小学生～中学2年生くらいまでは、成長のリズムや精神年齢の発達スピードが異なります。一般的には女子の方が、中学入学の段階で1歳～1歳半くらい精神年齢が高いといわれています。それに応じて、多くの私立中高一貫校では、キャリア教育の導入学年や、学年ごとの仕掛けにさまざまな工夫を凝らしています。

男子の場合には、将来のキャリアや職業選択、進路（大学の学部・学科）を早くから考えさせるよりも、まだ精神年齢の若い中学生の時期には、自律的な学習習慣を身につけることや学力的な下地をしっかりと鍛えることに力を注ぐケースが多くなります。つまり精神的に成長して社会的な視野や問題意識を持てるようになってから、じっくりと将来のキャリアや進路を考えさせるスタイルです。

一方の女子に対しては、男子よりも早い時期（中2くらい）から、時々将来の進路や、自分が希望するライフスタイルなどを考える機会を設け、それを学習の動機づけにもつなげていくようなキャリア教育が主流となっています。現実的、社会的な感覚が育つのが男子よりも早い女子にとっては、早い段階から自身の将来をイメージすることが、目標に向けて着実に努力をする動機づけになるのです。

私学の男子校や女子校では、こうした男女の精神的な成長・発達のリズムに応じて、キャリア教育を導入していくことができるのです。

さらに、男子と女子とをともに受け入れている「男女併学（別学）校」である◎国学院大学久我山中や◎かえつ有明のように、男子と女子では少し違った時期・内容のキャリア教育（それにつながる教育プログラム）を工夫している私学もあります。

共学校では、そのように精神的な発達リズムの異なる男子と女子が同じ環境の中にいることになりま



品川女子学院で行われている「起業体験プログラム」では、実際の起業と同じ手順で株式会社を設立。文化祭ではプレゼン発表も行います。

す。そこで共学校では、中学生の時期には成長の早い女子がリードする形で、将来の職業や進路選択のための体験学習に取り組み、高校の高学年になったときには、逆に女子よりも（一般的に）チャレンジ志向が強くラストスパートの馬力もある男子が、大学受験に向けて強気の受験校選択をすることで女子にも良い刺激を与えるなど、互いの特質を生かすような形でキャリア教育や進路選択が行われています。

そうした違いがあるなかで、どのような学校が、わが子の性格に合った、わが子にとっての良いキャリア教育、進学教育をしてくれるのか、多様な私学の教育姿勢、プログラムを保護者がよく調べて選択する必要があります。

こうした進学・キャリア教育のスタイルが、6年間の外国語（英語）教育や海外研修をはじめとしたグローバル教育や各教科の教育プログラムと不可分のものとなっているのは当然のことなのです。今後、希望する進路や職業によっては、海外大学への進学という道も、現在の中高生にとっては、自然の流れとなるでしょう。

このように、私立中高一貫校では、その継続性と時間的なゆとりを生かして、生徒たちの将来に向けた進路・キャリア教育にも時間を割くことができます。

つまり男子校・女子校・共学校いずれのタイプであっても、中学と高校の3年間ずつに分断された公立学校よりも、じっくりと「自分探し」ができる環境といえるのです。

将来の社会で求められる力や大学入試制度が変わり、 私立中高一貫校のキャリア教育も変わる！

～日本の教育が大きく変わる節目に、わが子の将来に求められる力(=21世紀型スキル)とは?～

2020年からの「大学入試改革」が、 日本の教育・学校・学力・入試観を変える！

すでに3年後に迫った2020年から、昨今マスコミでも盛んに取り上げられるようになった「大学入試改革」が実施されます。現行の「大学入試センター試験」を軸にした大学入試制度とは大きく変わるものになるということは、すでに多くの保護者をご存知のことでしょう。

これまでの「大学入試センター試験」に代わって、新たに導入される「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と「大学入学共通テスト(仮称)」には、それぞれ、「高校段階で身に着けた基礎学力」と「大学に進学するために求められる学力」を測るための役割が課せられます。

そのうち後者では、「思考力・判断力・表現力」を問うために「記述式」の回答方式を中心とした、いわゆる「PISA型(=OECD学力調査テストで出題されるような)」の問題が想定されています。

これらのテストは、近い将来PCやタブレット端末での入力(回答)による「CBT方式」を前提に開発され、採点にはAI(人工知能)のシステムが導入されるといわれています。

実際、導入の初年度にあたる2020年には、まだ現行の『学習指導要領』のもとで学んできた高校生が受験する形になるため、本格的な「新テスト」制度(システム)の完成は、高校では2022年度以降ともいわれています。その意味でも、このレポートの読者のご家庭のお子さんたちが、この変革の当事者であることは間違いありません。

いずれにしても、そうした日本の教育の大きな変

2020年大学入試改革

そこで問われるのは「知識」だけではなく、

思考
力

判断
力

表現
力

英語
力

化の節目の時期に中学～高校に進学し、やがて大学入試に挑んでいく現在の小学生と保護者にとっては、これから「中学～高校の6年間でどのような教育を受け、どのような力を身に着けるのか」が、わが子の将来にとって、かつてないほど重要な選択となってくるのです。

そうした変化にいち早く柔軟に対応し、2020年からの大学入試改革で求められる「思考力・判断力・表現力」や、4技能のバランスのとれた高い英語力を育ててくれる、さらには大学を卒業して社会に出たときに求められる総合的な学力と人間力(たとえば共生・協働・協調できる力とコミュニケーション力)、ICTスキルや課題解決力など、いわゆる「21世紀型スキル」を育ててくれるのは、やはり私立中高一貫校だといえるでしょう。

今後の大学入試と社会で求められる 「21世紀型スキル」とは？

「21世紀型スキル」の解釈はさまざまですが、ひとつは、世界の大手IT企業の主導のもとと教育関係者らが立ち上げた国際団体「ATC21s」(The Assessment and Teaching of 21st-Century Skills=21世紀型スキル効果測定プロジェクト)が提唱する概念がモデルとなっています。

つまり、これからのグローバル社会を生き抜くために求められる一般的な能力(批判的思考力、問題解決能力、コミュニケーション能力、コラボレーション能力、情報リテラシーなど)を指しているのです。

これは次代を担う人材が身に付けるべきスキルを規定したもので、各国政府も知識重視の伝統的な教育から21世紀型スキルを養い伸ばす教育への転換に取り組み始めています。



2017年に竣工した聖徳学園の最新鋭のICT設備が充実している新校舎です。